

令和2年度 重点教科の研究報告①<国語科>

【教科のテーマ】

「主体的・対話的で深い学び」を実現するための言語活動とその評価に関する一考察
～ルーブリックによる評価、ICT機器の可能性を探る～

1 はじめに

令和4年度からの新学習指導要領の実施まで時間が迫ってきている。新学習指導要領では、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域の学習が不十分で、読み取り中心の現在の指導を課題とし、科目の再編がなされている。そして、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、「言語活動」がますます重視されている。

また、情報化社会が進む中で、生徒が使用するタブレット端末の配備が実現しようとしている。生徒もほぼ全員がスマートフォンを所持する中でICT機器を教育の中で活用していくことは急務である。一方で、新型コロナウイルス感染症の拡大は、未曾有の出来事として私たちの生活様式を変容させ、オンライン教育の必要性を感じさせる。そのような状況下で、本校では、「ICTを活用した主体的・対話的で深い学びを推進するための取り組み」を行ってきた。本年度国語科での取り組みを大きくまとめると、以下の三点である。

(1) 「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善（言語活動例）

(2) 「思考力・判断力・表現力」を重視した考査問題の出題

(3) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けたICTの活用

今回の報告ではいくつかの事例を紹介する。

2 今年度の取り組み

(1) 「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善（言語活動例）

※事例1のみ詳細に述べ、事例2～事例4は紹介にとどめる。

事例1 1年生 国語総合（現代文）芥川龍之介「羅生門」

C 読むこと ア 脚本にしたり考えたりする言語活動

芥川の表現の特徴を踏まえて「羅生門」の続きを書いてみよう

<目的>

(ア) 生徒が表現の特色に注意しながら作品を読み直し、自分自身で「羅生門」の続きを書き、作品を読み合う活動を通じて、主体的で深い学びにつなげること。

(イ) 作品をじっくり読み直す活動を通じ、内容だけでなく、表現にも着目できるようにするとともに、生徒同士の読み合い活動を行い、対話的で深い学びにつなげること。

(ウ) ルーブリックを作成し、評価の工夫を試みること。

<研究の準備及び方法>

(ア) 対象クラス

1年生普通科6クラス（240名）

(イ) 学習してきたこと

・単元の前後にその単元の教材の内容に関する感想を書く活動を行い、「文章を書く」ということに関する抵抗感がないようにしてきた。

・『羅生門』に関しては内容、表現に関して読解の一斉授業を行った。

(ウ) 準備したもの

ワークシート

(エ) 実施方法

ワークシートに従って「羅生門」の続きを書く活動を行った。

- a 「羅生門」を読んで考えたこと、感じたことを書く。
- b 「羅生門」の表現の特徴を具体的に挙げ、表現の特徴を班に分かれて、共有する。
- c 「羅生門」の結末の表現の改稿を確認したうえで、下人の行方を想像する。
以下の条件を守って、「羅生門」の続きを書く。
 - (a) 「下人の行方は、誰も知らない」の続きを書く。
 - (b) 200字から400字で書く。
 - (c) 芥川の表現の特徴を踏まえて、参考にして書く。
 - (d) 作品を書く上で踏まえた芥川の表現の特徴を説明できるようにする。
- e 班に分かれ、作品を回し読みし、どんな表現がよかったか、感想を書き合う。
- f ルーブリックにのっとり、教員が評価をする。

観点	文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読むことができている（読む能力）
A	芥川の表現の特徴を具体的に挙げながら説明がされており、筆者の表現の特徴を正確に捉えている。さらに、作品の中でも、本文中の表現を参照した表現を3か所以上用いて作品に登場させるとともに、作中の時代、語り手、比喻、語彙、文体の3点以上の面で工夫がなされている。
B	芥川の表現の特徴に関する説明がされており、筆者の表現の特徴を正確に捉えている。さらに、作品の中でも、本文中の表現を参照した表現を用いて作品に登場させている。
C	芥川の表現に関する説明がされておらず、表現の特徴が捉えられていない。また、作品の中に本文の表現を参照した表現が1か所も用いられていない。

<研究の検証>

(ア) 結果

全ての生徒が前述の指定(a)(b)までを踏まえて書くことができ、(c)に関しても大半の生徒が踏まえていた。しかし、(d)に関しては課題が残る結果であった。例を挙げる。

a よく工夫がされた表現

- ・語り手としての「作者」の登場と、「作者はさきほど〇〇と書いたが、」といった否定の表現を用いて表現する
- ・視点が下人から老婆に映ったのをそのままに、「老婆の行方も誰も知らない」と作品をしめている。
- ・「子の刻」などの平安時代の事象を用いながらも、「エゴイズム」などのカタカナ語を用いている。
- ・複数の動物の比喻を用いている。
- ・作中に何度か出て来る「にきび」「きりぎりす」を再登場させる。

b 不十分であった表現の説明

- ・「羅生門」の雰囲気似せて書いた。
- ・なるべく詳細な表現になるように工夫した。

(イ) 考察

- 生徒は小説を読む際に「表現の工夫」に着目して読む必要があることを理解した。
- 生徒同士の作品の読み合いの中で、「この表現がよかった」「この表現は芥川らしい」という発言や記述が多くあった。
⇒読み合う中での気づきが多くあったため、読み合いの時間をもう少し長くとり、生徒の書いた作品の批評も行えるとより深い学びにつなげることができたように感じる。
- ▼読み取った内容を明瞭に言語化することには課題が残る。
⇒読み取った内容を正しく表現できるような練習が必要。段階を踏み、具体的にこの表現にはこのような特徴があると言語化する手助けが必要であった。
- ▼表現をする際に、指定の「芥川の表現を踏まえる」ことよりも「自分の書きたいこと」を優先してしまう生徒が少しいた。
⇒書きたいことを書くというのも大切だが、芥川の表現という枠の中で勝負できるように指導をすべきであった。また、今回の趣旨である筆者の表現の工夫に着目する点を強調すべきだった。
- ▼発表をする際に全体への共有を行えなかった。
⇒ルーブリックにおいてA評価をした生徒の作品を書画カメラで投影し、工夫した箇所を指摘しながら発表をする活動を試みることも検討すべきであった。

事例2 1年生 国語総合（現代文）山崎正和「水の東西」

B 書くこと イ 説明や意見などを書く言語活動

筆者の論理構成を踏まえて日本と西洋の文化の違いを比較する文章を書こう

<目的>

論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること。

<取組内容>

教材を読んだ後に、筆者の論理構成を踏まえて日本と西洋の文化の違いを紹介する文章を書く。

<研究の検証>

具体例を用いて対比をしながら違いを指摘するという型はほとんどの生徒ができていた。また、日本と西洋の違いについて文化の側面から考えようとし、神の考え方や政治への姿勢、楽器、城など独自の視点で書くことのできた生徒もいた。

事例3 1年生 国語総合（現代文）中原中也「サーカス」石垣りん「崖」

B 書くこと イ 説明や意見などを書く言語活動

詩の形式や修辞法とその効果について指摘して、鑑賞文を書こう

<目的>

対象を的確に説明したり描写したりするなど、適切な表現の仕方を考えて書くこと。

<取組内容>

二つの詩を通じて詩の形式や修辞法について学んだのちに、その効果について説明を含めて鑑賞文を書く。

<研究の検証>

詩に用いられた修辞法とその効果についての的確に説明させることができた。授業で確認した内容以上の考察を付け加えたり、同じ作者の他作品なども踏まえて説明することのできる生徒もいた。

事例4 3年生 現代文B 小浜逸郎「人はなぜ働かなくてはならないのか」

C 読むこと イ 情報を読み取り、まとめて発表する言語活動

接続詞と具体例の効果をつかみ、筆者の主張を理解しよう

<目的>

接続詞の効果をつかみ、読解にいかす具体例の意図をつかみ、主張を理解すること

<取組内容>

事前に接続詞（語）を押さえ、該当箇所を読み進んだ時に、その役割、その後の記述に注意して読む。事前に作ったノートの自己解答欄に、具体例の内容をまとめ、具体例が意図する主張を読み取る。

<研究の検証>

事前に取組のような準備をしたうえで、読むことで主体的に読む姿勢を身につけさせることをねらいとした。生徒相互の対話的な学習としての学びを今後取り入れる。

(2) 「思考力・判断力・表現力」を重視した考查問題の出題

1. 目的

(ア)「記述をする」に対して苦手意識をもつ生徒に対し、考查の記述問題を通じて、主体的に取り組む姿勢を身につけさせるとともに、解答の見直しの際に、解答の工夫の余地について気づかせること。

(イ)国語の考查に対して「暗記する」のではなく、「理解する」「考える」という姿勢で臨むようにすること。

2. 取組事例

(ア) 1年生(国語総合(現代文))

- ・ 芥川龍之介「羅生門」において登場する語り手「作者」が平安の人物か否かとその根拠を問う問題。

授業内では、下人の心情を中心に読解することを中心としたが、平安時代の事物が多数出現すること、「作者」という形で語り手が登場することも確認した。また、小説の読解において大切なこととして、「本文中の記述から」考えるということを何度も授業内で確認した。

この問に対し、7割程度の生徒が平安時代の人物でないと指摘をしていたが、根拠まで示すことのできた生徒は、6割程度であった。根拠としては「サンチマンタリズム」「旧記」という語句を用いることを想定したが、正答した生徒はこの表現を用いた。

- ・ 野元菊雄「言語は色眼鏡である」において筆者の主張と同様の結論を出す別の文章と比較する問題。

生徒に対し、「筆者の結論を理解した上で別の文章を読み、比較する問を出す」と予告をし、「言語によって世界の見え方が変わる」という結論を理解しているかを問う出題をした。比較した文章は、藤平誠二『日本人の住む言葉の世界』である。文章の比較においては、「同様の結論か否か」「問いかけを使用しているか」「具体例を述べているか」を問う選択式の問題であったが、正答率は5割程度であった。

しかし、考査の返却時に生徒同士で相談させ、「どこに問いかけがあるか」「具体例は何か」ということを聞くと、大半の生徒が指摘をできた。対話をすることも必要ではあるが、一人で時間内に考えを深められるようにする指導も必要だと感じた。

(イ) 1年生(国語総合(古典))

- ・ 異なる出典の「検非違使忠明」を比較し、表現の効果について記述させる問題。

授業では、文法的説明と現代語訳を中心とした読解を行った。また、国語便覧を用いて出典の特徴を確認した。「検非違使忠明」は1年生古典における定番教材ではあるが、『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』では、末尾が異なる。『今昔物語集』の方においては、仏教的説話の側面が強く、また伝聞であるという事が明確にわかるようになっている。

そのため、この表現の違いに関して思考し、表現する問としてこの問題を出した。生徒に対しては、文章を比較する問を出す予告をした。7割程度の生徒が記述をすることができおり、記述をした生徒のほとんどが、「仏教的説話」である側面が強いことを指摘することができた。一方で伝聞的であるということへの指摘は薄く、引き続き文章を比較に関しては考えを深める必要がある。

同様の比較する問として別の時期の考査において「芥川」『伊勢物語』の後半の鬼の正体を明かす章段の役割についても考えさせた。「芥川」においては、選択式の問いで出題した。

- ・ 『土佐日記』において授業で取り扱った箇所とは別の日の記述を用い、季節や時間を答える問題。

『土佐日記』で「門出」を取り扱った際に、時刻の示し方と月の異名を覚えるように指導した。そこで、暗記したことを文章で読解し、思考した内容と重ね合わせることを意図して出題した。

生徒は、本文中の「戌の刻」に関しては暗記をしており、あるクラスにおいて正答率は7割ほどであったが、別の日の記述「卯の刻」になると5割を下回った。関連付けて覚えるという指導が必要である。また、季節に関しては、「春の海」という記述から「春」=1月=睦月と考えさせる問題であったが、文章の中でどこに注目すればわかるのかが理解できていない生徒が半数ほどいた。「覚える」に加え、「思考する」ことも必要だということを生徒に伝えていきたい。

- ・ 助動詞の問題において、活用表から考える過程を問う問題。

本校には、生活文化科があるが、教育課程上、古典の学習は1、3年生で行う国語総合のみで終わってしまうため、文法事項を細部まで覚えるというよりも、古典に親しむことを意識して授業を行っている。そのため、助動詞の見分けにおいて、覚える形での出題ではなく、既習の用言の活用の知識と助動詞の活用表を用いて思考する形での出題をした。

生活文化科の生徒は学習に対して苦手意識を持つ生徒が多く、文法の学習には特に消極的である。「表を活用して考える」ということを強調して考査に臨ませたが、文法を苦手とする生徒は、記述がないことも多数であった。思考することに対する苦手意識をなくしていきけるよう、授業の中でともに考えるということをした。

(ウ) 2年生(現代文B)

- ・ 中島敦「山月記」で「胸を灼かれるような悔い」の内容を35字以内で思考させる問題。
授業内で、「理由もなく押しつけられたもの」＝「人間の存在・運命の不条理」に対する「恐れ」や「(人を裂き食ろう)倫理的苦痛と人間性の喪失(埋もれ消えていく人間の心)」の認識、また、虎となった原因として思い当たる「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」を飼いふとらせたことへの反省などについての理解を深めている。
ここでの意図は、「悔い」が反省ではなく、「才能の空費」＝なお捨てきれない「詩への執着」であることを読み取らせることにある。李徴の悲劇が、現代人にも通ずる問題であることを生徒に自問させ、読後の感想文につなげた。

(エ) 3年生(現代文B)

- ・ 小浜逸郎「人はなぜ働かなくてはならないのか」で問題文中の労働者としての「誰か」(A)と、消費者としての「誰か」(B)を文中の表現を使い、20字以内で表現させる問題。
授業内で、「人は労働の協業や分業の中で複数の人と関わりながら、仕事の成就を目指す。この過程で人は社会的人格としてのアイデンティティを承認されていく。」という筆者の主張を学習した。この確認として、この問を用意した。
特に(A)を主題にからめて「協業」「分業」のワードを使って表現できるかがポイントだったが、部分点が限界で、まず正答は望めなかった。キーワードが何なのかを意識して、文章の主題を読み取ってまとめる力は最も欠けている力だと思う。今後も1題は加えていきたい。
- ・ 小林秀雄「無常ということ」で、「無常」と「常なるもの」の内容を「解釈」という言葉を使って、30字以内で表現する問題。
本教材は、小林秀雄の代表的な評論で、昭和の評論にも慣れさせるために授業で扱ったが、非常に難解な文章であった。鎌倉時代の女房が見せる、この世が無常であるからこそ「現世での幸福を捨て、ひたすら後世の幸福を願う」姿勢を筆者は評価し、常に新しい知識を追い求める、際限のない現代人の知識偏重を批判する。
そこで、この文章の主題に関わる設問として本問を用意した。設問の条件が複雑で文章自体も難解であったため、ほぼ正答なしであった。返却時に設問の意図を説明して今後につなげた。伏線となる設問が必要であったかと反省している。

(3) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けたICT機器の活用

1. 目的

- (ア) 生徒自身が考え、主体的・対話的に学ぶ時間を確保すること。
- (イ) 図や表、写真などの資料を視覚的に提示することで、生徒の興味関心につなげ、主体的な学習を促すこと。また、生徒の理解を深めること。
- (ウ) 資料を提示しながら生徒が発表をすることで発表の質を高めること。

2. 取組事例

事例5 1年生国語総合(現代文) 野元菊雄「言語は色眼鏡である」

<目的>

教材に入る導入として言葉に関する生徒の興味関心を高めること。

<取組内容>

パワーポイントを用いてクイズ形式で日本語と外国語の語彙の違いについてクラスメイトと対話をしながら、考える。その際、エラ・フランシス・サンダース『誰も知らない世界のことわざ』の絵本をスクリーンに映し、視覚的に興味を促した。

<考察>

アクティブ・ラーニンググループを用いて行ったが、生徒同士の対話が教室よりもスムーズに行うことができていた。対話の中で教材の結論である「文化によって語彙が異なる」ということに行きつく生徒もおり、言語という身近なことについて考えさせることができた。

事例6 1年生国語総合（現代文） 古典文法の説明

<目的>

文法説明を視覚的に見やすく提示することで円滑に行うこと。

<取組内容>

黒の背景に白文字でスライドを作成し、黒板に直接投影して文法的説明を行った。

<考察>

活用表を素早く見せたり、比較したりする際に有用であった。黒板に書く時間を短縮できるため、生徒が考える時間を長くとることができた。特に用言の活用表を比較し、規則性を見つける際に役立った。

事例7 2年生現代文B（生活文化科） 北原保雄「言葉は変わるもの、されど伝承すべきもの」

<目的>

古来から伝わる言葉を理解し、新たにデザインという形で創造することで生徒の理解を深めること。

<取組内容>

教科書本文を読み、日本古来から伝わる言葉（例：薫風）を調べ、理解させたうえで、その語を商品化するならどのようなイメージになるかを作成させた。発表の際には、生徒の作品を投影した。

<考察>

創造をするにあたり、「語」の選定に時間がかかった。「語」の意味としては美しいものの、無形のもを有形にすることに苦勞するものが多く見受けられた。その過程で多くの語を調べたり、試行錯誤できたことはよい経験だったと感じる。生活文化科は3年次にファッションショーを控えているため、イメージを出力するよい練習となったと捉える生徒が多かった。プロジェクターを使うことで、カラーでみんなに見せることができたことも視覚的効果として有用であった。反省点としては、調べることはしたものの、日本古来の「語」が持つ意味を本人以外に共有する時間を多くもてなかった。もう少し時間配分に気を配り、丁寧に共有できたほうがよいと考える。

事例8 2年生古典B 日記文学について

<目的>

図や表などを提示し、日記文学作品を体系的にとらえること。

<取組内容>

パワーポイントを使用し、スライドを投影した。土佐日記、蜻蛉日記、和泉式部日記、更級日記の特徴をとらえていった。その際には、それぞれの時代背景や人物関連も系図などを交えて注目しながら作品を比較した。

<考察>

通常授業形態よりも、スライドにまとめていた分、テンポよく授業が進行した。生徒からも「一作品だけを見るよりも、何作品かをまとめて見ることで、時代背景や人物の相関に興味をもった」、「作品をもっと読んでみたい」という感想が多くみられた。一方で展開が早かった分、文法知識や基礎知識が足りない場合は鑑賞に入りにくく思われたため、どの程度を補足しながらスライドを見させていくかの比重を検討したく思う。

事例9 2年生古典B 「小式部内侍が大江山の歌のこと」『古今著聞集』

<目的>

短歌の修辞法（掛詞）を視覚的に学ぶことで理解を深めること。

<取組内容>

本文に出てくる「大江山」の歌を修辞法に触れずに口語訳をし、定頼の中納言の「丹後へつかはしたる人は参りにたりや」の返答として適切かどうか考えさせた。返答としてかみ合わない

ころから修辞法の存在を示し、地名を指摘させるなどの作業をして掛詞の存在に気が付かせた。まとめとして、掛詞の修辞法についてまとめた。その際、パワーポイントで地図などを投影し、掛詞についてもパワーポイントのアニメーションを用いながら説明をした。

<考察>

教科書や問題集等では語注をたよりに掛詞を指摘することができるが、初見の短歌においても掛詞が指摘できることを目標に活動をおこなった。パワーポイントを用いる場合、口語訳を短い時間で提示できたり、歌枕の地の写真なども提示できたりするのが利点である。生徒側には手元に情報が残るように、作業用のワークシートは必須であるように思う。板書時間が短い分、生徒に考えさせる時間や、話し合う時間が取れるのが魅力的である。

<研究の検証>

I C T機器を活用することで、①視覚的に生徒に伝えられるため、印象に残る②テンポよく授業を進められるため、生徒が考える時間が長くとれる③発表の際に、要点を伝えやすい、要点を聞きやすいというメリットがあった。しかし、①教室では反射等で見えにくい場合がある②ワークシートがない場合、うまくノートをとることができない生徒がでてしまう③展開が早くついていけない生徒が出てきてしまう④パワーポイントを作成する場合、時間がかかる⑤パワーポイントを使用すると授業シナリオが固定化され、変更が効きにくいというデメリットもあったが、導入や発表などの際に用いることは有効であると考えられる。

3 研究のまとめと今後の課題

国語という教科は、「思考力・判断力・表現力」を特に重要視する教科であると考えられる。「話す・聞く」「読む」「書く」どの場合にも、考えなければすることはできない。その際には、語彙などの知識をインプットすることと、表現してアウトプットする方法を知ることの両輪が必要だと考える。

本校の生徒は、授業には落ち着いて取り組むことができるが、自学自習を苦手とする生徒や学習に対して苦手意識を持つ生徒も多く、授業内では受け身になりがちである。一方で、明るく活気のある雰囲気であるため、発表などの際には、意欲的に参加することのできる生徒も多い。そのような中では、一斉授業による「基礎知識」のインプットおよびその定着に合わせ、発表などのアウトプットの二つを組み合わせることが有用であると考えられる。インプット、アウトプットのどちらにおいても場合によってはI C T機器が有効になるため、生徒の状況を見ながら活用していくのがよいと考える。

今年度は、「自分で考える」「ペアで対話する」「全体に発表する」という流れを授業の中心となる発問の際に行っていた。そうすると、ほぼ全ての生徒が何かしらの「自分の解答」を用意し、対話するための材料を作っていた。対話をする中で「わかった」「確かに」「なるほど」「なぜ」という声が上がってくることも多かった。やはり対話的な姿勢は生徒の学びにとって必要不可欠である。対話的な学びが必要である以上、情報化社会であるといっても、やはり「オンライン教育」には一定程度の限界があるように感じる。本校国語科でも、休校期間中に動画の配信をしたが、生徒の反応が見られない中でのオンライン教育には限界を感じた。家庭学習の中で復習として用いる分には有用であるように感じるため、今後も試していきたいと考えている。

また、言語活動を行う中で、評価に関しては今後も考えていかなければならない課題である。今回、ルーブリックを活用してみて、評価の基準をすり合わせることや生徒の実態に合わせてルーブリックを見直すことが困難であった。複数の教員が関わっていることの多い科目であるとともに難しいだろう。生徒が作品を作る活動を取り入れることは、主体的で深い学びを推進するうえで重要なことではあるが、評価の基準をどのように作るのかに関しては今後も検討を続けていきたい。